編集後記

今年八月二八日、羽田から長崎空港へ旅立った。

旅の目的は「書物・出版と社会変容」科研の書物・史料調査と第七一回「民衆思想研究会」への参加である。

二〇年前ぐらいに一度、長崎を訪れたことがある。それは高知から長崎へ坂本龍馬の史蹟を追った旅であった。前回と比べて驚いたのは、街を挙げて龍馬一色だったことである。前に来たときは、主な史蹟の他は、「やきとり龍馬」と、思案橋の近くに「亀山社中」というスナックがあるだけだったが、今回は、街路に幟がはためき、まんじゅうやハンバーガー・ラムネまで、至るところ龍馬・龍馬・龍馬……。龍馬で溢れていた。恐るべし福山龍馬、恐るべし大河ドラマ！

書物・史料調査は、島原市立図書館の松平文庫、長崎歴史文化博物館などで行われた。ここでは、民衆思想研究会について書きたい。

研究会の報告は三本。いずれも長崎地域に密着したテーマである。書物研究として位田絵美氏の「島原の乱と山田右衛門作―『長崎旧記類』を中心に」があった。元禄から享保にかけて編纂された『長崎拾芥』『崎陽雑記』『長崎根源記』『長崎（始原）記』から民衆思想を探り、さらに、島原の乱において、一揆軍の背信者とされる山田右衛門作の実像に迫ろうとする実に意欲的な発表であった。

街頭に溢れる龍馬たち

位田氏は、これらの旧記は虚実が混ざっており、史実ではないという理由で、歴史学では研究されてこなかった、文学の立場から報告すると述べた。

質疑応答のとき、「悪党」研究・須田努氏が、自分は虚構性のある史料に関心をもっているので歴史研究者としては変わっているのかもしれない、と述べ、会場の空気が一気になごんだ。

私は秘に（虚実が混ざった旧記の性格は、明君録にそっくりだ）、そして、（明君録と言えば、第一人者は深谷克己）と思い、目の前に深谷氏本人が座っているのに気づいた。盛んに発言をしたのは、若尾政希氏である。氏も『太平記評判秘伝理尽鈔』という物語を研究している。

報告者の前の席には横田冬彦氏がいた。氏は著書である通史『日本の歴史16 天下泰平』の叙述を、『大坂物語』という仮名草子から説き起こし、最後を軍記物と『日本王代一覧記』によって歴史意識と「家の歴史」を形成した、依田長安で締めくくっている。

改めて見渡すと、あそこにも、ここにも。物語研究を厭わぬ歴史研究者が集まっていた。物語は史実そのものではない。しかし、物語が広く読まれたことは事実であり、つまるところ歴史は人間が動かすのだから物語は歴史を動かす。いつの世も人は物語を必要としている……。

質疑応答を聞いていて、文学と歴史の敷居が低くなったこと、また、物語が社会にどう影響を与えたのか、これが歴史

風雲・原城本丸より天草方面を眺む

学の大きなテーマの一つに成りつつあることを感じた。

懇親会となり、隣り合わせた坂本達彦氏と、「翌日は灼熱のなかの巡見だ、体力温存のため早めに切り上げよう」と話していが、ユルイ縛りは簡単に綻び、崎陽の夜は際限なく更けゆく……。

巡見は島原一揆、風雲・原城である。市民も参加し六〇人ほどでバスは満席。「三〇歳未満は補助席」という鉄の指令がでる。このときほど歳を喰っていて良かったと思ったことはない。

島原半島の付根・千々石観光センターというドライブインまで約一時間。若尾氏が「じゃがちゃん」を食べているのを目撃。島原はソーメンと並んで、じゃがいもが名産らしい。

バスは半島の突端を廻り口之津町歴史民俗資料館へ。口之津は山崎朋子『サンダカン八番娼館』にも描かれた、「からゆきさん」出港地。石炭積み出しや民具資料とともに「からゆきさん」の展示がある。国学の書物もあった。宮負定雄研究者の小田真裕氏が、「海民の国学〈〈」と呟いている。これはきっと「都市の国学」を意識した発言に違いない。

昼食後、いよいよ原城だ。近年の発掘調査により新たな事実が多数発見されている。その事業に携わり、昨日の会で発表された南島原市教育委員会の松本慎二氏のガイドで踏査する。

想像以上に巨城だ。周囲は起伏に富む。籠城軍三万七千と幕府軍一二万余りが死闘を演じたのかと思うと感慨深い。未だ発掘されていない人骨が多数眠っているというのも切なく、地面に足を降ろすのがためらわれる感じになる。

原城文化センターには、原城発掘現場のレプリカがあった。松本氏によれば、人骨は全骨格が揃っているものはなくバラバラで、骨の上に大石が投げられている。また、実際の人骨を手に、大腿骨などの刀傷が後ろから付けられているものが多いと解説した。それに対し、それは異教徒の魂復活を恐れ封じる、呪術的な意味があったのではないかと質問があった。

センターを出ると、雷鳴轟き豪雨が襲ってきた。小やみを待って、キリシタン墓石を見学して巡見は終わった。

帰路、再び立ち寄ったドライブインで、若尾氏が「じゃがちゃん」を食べている。（お、なんだ二本目だぞ）。そして後で、「横田さんも食べておられた」と聞かされ、しかも「ウマイ」という。（しまった）。私は「じゃがちゃん」を食べないとまっとうな歴史研究ができないのではないかと不安になった。食べなかったことをいまも後悔している。

（小川記）

千々石名物「じゃがちゃん」と売店